

※「高浜市誌資料[六]」より

◀大正時代の鶏舎

人工孵化技術の導入で数が増え、鶏舎を新築して大量に飼育する形式に進化した。

▼昭和30～40年代の鶏舎

昭和34年の『高浜町勢要覧』には「養鶏農家750戸」と記載がある。



▲加藤弥七氏胸像

養鶏組合解散後、吉浜小学校校庭に移設された。「背の高い人でした。」と孫の節子さん。

吉浜地区の養鶏・人工^{ふか}孵化技術の祖

加藤^{やしち}弥七さん<1881(明治14)～1969(昭和44)年>

“撮っておき” の たかはま

【第32回】

「ひと」「もの」「文化」などなど、有形・無形を問わず、高浜市の日常の暮らしの中にあるとっておきの「お宝」を紹介しします。

たかはまの味といえば「とりめし」。そもそもこの郷土料理が生まれたのも、かつて、吉浜地区で養鶏が盛んだったことから。

鶏の人工孵化の技術を広め、高浜市を西三河屈指の養鶏のまちに導いたのが、現・芳川町の加藤弥七という人物である。大正時代初期から卵を人工的に孵化させる技術によって飼育数を増やし、品種改良にも挑戦して多産種を育てることに成功した。この革新的な技術を地域に広めたことが、戦前には養鶏大国とよばれるまでの成長につながった。地の利・時の運も利用して高浜市にひとつの産業を興した功績は大きい。

孫の加藤節子さん(芳川町)によると「祖父は非常に研究熱心で、仕事の傍ら安城の農業学校に指導を受けに行っていたそうです。九州などから祖父のもとに孵化技術を学びに来る方も多く、地元に戻って養鶏で成功されたと聞いています。仕事には厳しいひとでしたが、村芝居が好きで、当時神明社本殿北側にあった芝居小屋で、三味線を披露し、若い衆の演技指導もするような趣味人の一面もありました。」

また、生前の「(前文略)養鶏は鶏を飼うこと、養うこと、愛することである。」(『高浜市誌資料[六]』より抜粋)という言葉が、地域全体の発展を願い骨折りを惜しまなかった弥七さんの人柄をしるばせる。そして、今も吉浜小学校の校庭に残る胸像には、進取の気概に富むといわれる明治男の凛とした面差しが表されている。

LELA A PÁGINA EM PORTUGUÊS!

ポルトガル語のページを読んでください!

広報 たかはま

編集・発行／高浜市役所総合政策グループ


〒444-1398 愛知県高浜市青木町四丁目1番地2

TEL (0566) 52-1111 FAX (0566) 52-1110

<http://www.city.takahama.lg.jp/>

電子メール info@city.takahama.lg.jp

早期配布にご協力ください。

 **VEGETABLE OIL INK** 広報たかはまは植物油インキを使用しています。